

# 働稼再発原

## 私たちは許さない

### 飯舘村の 一人の青年として 村のために できること

福島県飯舘村で、和牛繁殖を営んでいた菅野義樹さん（34歳）。

震災後、拠点は北海道へ移したが、離ればなれになった仲間とともに村の未来図づくりを始めようとしている。

文・写真＝菅野義樹



妻の美枝子と娘の葵。生まれた場所は最初の避難先である茨城の助産院だが、飯舘にとっても大切な新しいのちだ  
写真＝宮崎雅子

土地は受け継ぐもの  
という意識

私は福島県飯舘村で、農業後継者として農業に携わっていました。小さい頃から農家の18代目として跡を継ぐことを考え、県外の学校農場で働いていたときも、飯舘に戻って農業することをつねに想定しながら日々を送りました。

北海道へ避難したあと、「なぜ福島の人々の多くは避難しないの？」「なんで除染なんか無駄なことするの？」という質問をよく受けました。そんなとき以下の話をして私たちの土地に対する思いを説明してきました。

私には飯舘村に、和牛生産や野菜生産で精力的に農業をしていた20代の友人がいました。原発事故の直後に、彼は父親から促され、お嫁さんと子どもを連れて避難しました。私もそうでしたが、両親と自分たちが世話をしていた牛を残して避難することは、後ろ髪を引かれる思いだったようです。

そんな彼とは震災直後から、電話などで互いに不安な気持ちを話したり、意見交換をしたりしていました。

ある日彼は、私もびっくりする



朝霧のなかコイコイと呼ぶと、ボス牛を先頭に寄ってくる。飯館の放牧地で見られたいつもの風景

ような考えを話してくれました。「誰かが飯館の土地を守っていかなくてはなりませんよね。俺がやんなかったら誰かがやんなくちゃならない。でも、子どもいるし……」と。若い彼から「土地を守る」という言葉を聞き、驚いたのと同時に、非常に誇らしく思いました。60代の農業者ではなく、20代の後継者が言ったのです。

私たち農業者は、土地は先祖から受け継いできたもの、という意識を強くもっています。土地は所有したり売買するものではなく、「受け継ぐもの」といった観点で捉えているのです。代々引き継いできた土地を放棄することは、農家の長男としての責任を放棄することを意味します。私も彼も、その責任を今後放棄するかもしれないことに、後ろめたさを感じています。このことは農業をしていない人には理解しづらいかもしれません。

現在も福島県内に残り、村の除染を行ないたいと思っている親父たちの世代は、受け継いできた土地を、それこそわが子のごとく守る義務感を新たにしているのだと思います。自分の子どもや家族、集落、村、そして農業。家父長制

のなかで親父たちは、自分が帰属する場所を守る責任を感じてきました。瀕死の子どもをあきらめない親のように、瀕死の傷を負った土地を何とかしたいと思う親父たちの気持ちを考えれば、「土地をあきらめろ」など、自分はいえる立場にはありません。

しかし、除染に対しては、県内外からきびしい目が向けられています。森林の除染研究が進んでいないこと、巨額のお金がかかること、それが大手ゼネコンに流れることがおもな理由です。報道ではこうした問題のみが取り上げられるため、農家もつ土地への思いは伝わらず、なんとか地域を再生したいと願う人たちの心は、他人事の論理で批判にさらされ、固く閉ざされてしまっています。村民は原発事故の被害者なのに、批判の対象となってしまうのです。

### 幼稚な正義の押し売りが生み出す分断

原発事故後、放射能の情報を入手するにはインターネットがとて大きな役割を果たしました。ただしそこには、このような意見もあふれていました。「いま避難し